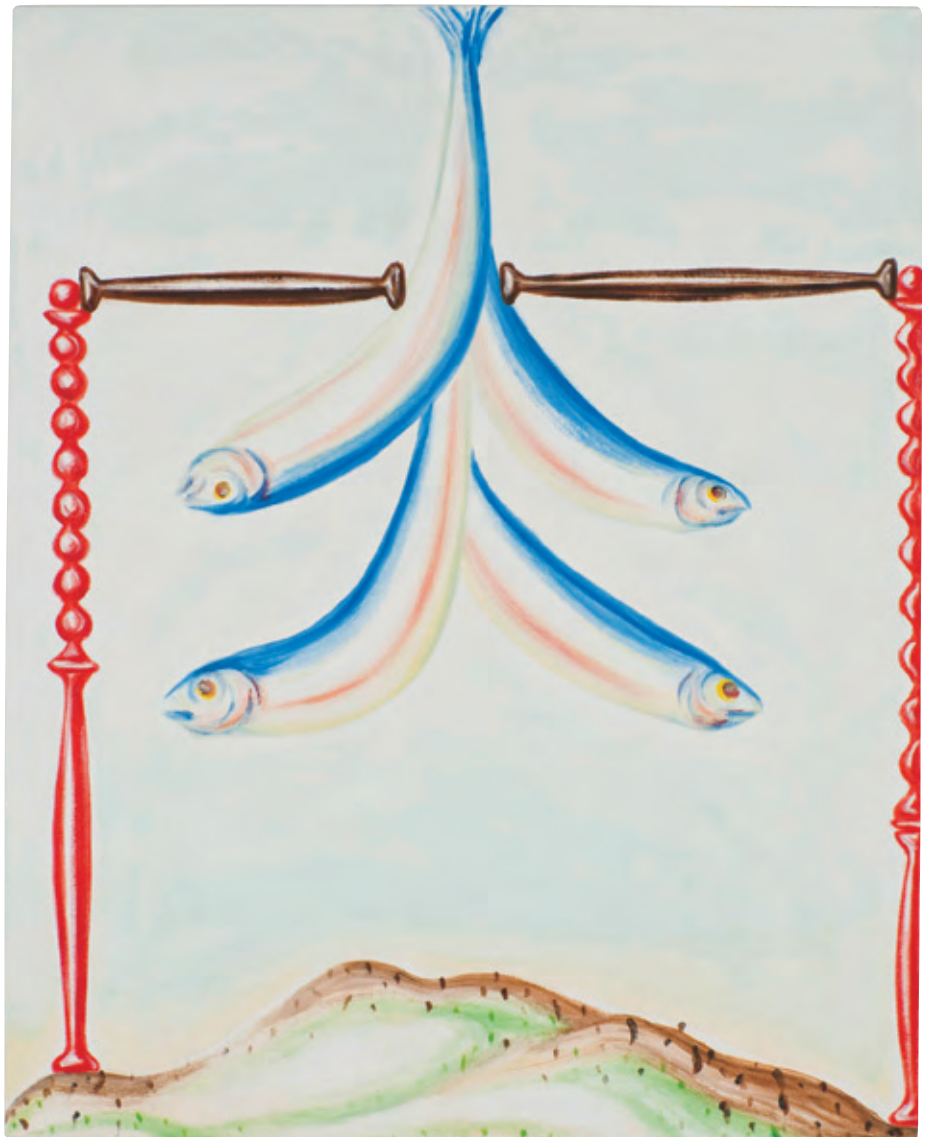


AR CA DIA

57
SUMMER 2013

Okazaki City Museum News

岡崎市美術博物館ニュース
[アルカディア]



眼の極楽⑧ 江戸の花園

館長 榊原悟

卯の花・菜の花

今年もまた郭公の鳴く声を聞く。

その初音を待ちわびたのは、王朝人であった。夜は深更、どこるか払暁の朝に及ぶまで、眠い目をこすりながら、ひたすら耳をそばだてたという。

確かにその声は、鶯のそれほど長閑かで朗らかではない。鶯の声が日のある終日、なかでも家内揃った飯時分にこそ相応しいのに対し、郭公の声は深夜に聞いてこそであろう。またそうであればこそ、王朝人は郭公を、

しでの山こえて来つらんほととぎす

恋しき人のうへかたらなん 伊勢

と死出の山路を越えて来た鳥と見、そのかん高く鋭い声に、

旅ねしてつまこひすらし時鳥

神なひ山にさ夜ふけなく 読人不知

つま恋いの情を感じたのである。

とは云えわたしにはその声が、「テッペンカケタカ」とか「トッキョトカキヨク」とは、どうにも聞こえない。そもそもこれでは音の数が合わないではないか。しかし鶏の鳴き声を「クックドゥードゥルドゥー」、犬の吠えるのを「パウワウ」と聞こえる人間もいるのだ。刷り込まれば、つまりは学習すれば、そう聞こえるのだから。となれば郭公の鳴く音に「テッペンカケタカ」の音を聞き分けるのも、やや大袈裟に云えば一つの文化であった。

いや、ことは鳴き声の聞き分けに係わるだけではない。わたしにはその声は、

郭公二声夏をさだめけり

と、雪中庵こと大島蓼太(二七二八〜八七)が断じたように、夏の到来を告げる声でもあった。文化を云うのなら、むしろそのこと自体を云うべきだろうか。そう云えば古歌にも、

いつのまに五月きぬらんあし引の

山ほととぎす今ぞ鳴くなる 読人不知

とある。前掲した伊勢の「死出の郭公」の歌も五月五日に詠んだという。郭公に五月の夏の景趣を思うのはわたしたちに刷り込まれた歌のところであり、まさしく文化であった。

むろん夏の到来を告げるのは、郭公だけではない。鳥があれば花にもあるのが道理というもの。その花は、

わが宿のかきねや春をへだつらむ

夏来にけりと見ゆる卯の花 源順

とあるように、春と夏とを隔てる垣根に咲く卯の花であった。

しかもこの卯の花、古来、郭公の宿る花と考えられてきた。

卯花のにはほふさかりは月きよみ

いねずきけとやなくほととぎす 伊勢

さして見映えが好いとも思われぬこの花を、わたしたちの先祖が愛でたのも、これが郭公と一体となつて夏の到来を告げてくれるからであった。

その意味で忘れ難い曲がある。

卯の花の にはふかきねに

時鳥 早も来鳴きて

しのひ音もらす 夏は来ぬ

云うまでもなく「夏は来ぬ」の一番。佐々木信綱の作詞、小山作之助作曲の小学唱歌である。明治二十九年(一八九六)の作だ。以来、時代をこえ歌いつがれてきた。わたしなど夏が来れば、いや、季節に係わらず気分好い折など、この歳になつてもつい口に出る。平易なメロディーが何とも気持ち好い。二番はこうだ。

五月雨の そそぐ山田に

早乙女が 裳裾ぬらして

玉苗植うる 夏は来ぬ

この後も歌詞には「橘の かおる軒はに」「水鶏鳴き」「螢とびかい」「夕月涼しき」「夏は来ぬ」と万葉以来、和歌によって磨き澄まされてきた雅語が続く。それも五、七、五、七、七、五の文字(音)が連なる。わたしたちの耳と心に最も心地好いリズムである。さすがは佐々木信綱(一八七二〜一九六三)の作と云うべきか。この一曲の歌詞のうちに和歌が育んだ初夏の景趣を、余すところなく語り尽くす。

なんと好い歌だろう。その歌を小学生のころから歌ってきた。意味も充分分かんぬまに、であったかも知れない。それはそれで仕方ないだろう。だが平易なメロディーのせて歌詞に親しむ―これ程の日本語教育も無いのではないか。いや歌詞に散りばめられた雅語とその背景とを知ることが、ほぼそのまま日本文化の伝統、その美意識とそこを理解することに他なるまい。

それにしても、わたしたちが歌ってきた小学唱歌には、この「夏は来ぬ」に限らず、日本の文学的伝統に根づいたものが何と多いことか。ここではもう一つ、そうした曲を挙げておこう。万人の愛唱歌である。

菜の花畠に 入日薄れ

見わたす山の端 霞ふかし

春風そよふく 空を見れば

夕月かかりて にほひ淡し

高野辰之作詞、岡野貞二作曲の文部省唱歌「朧月夜」(大正三年一九一四)の一番である。高野辰之(一八七六〜一九四七)と云えば、「春の小川」「春が来た」「紅葉」「故郷」などの傑作唱歌を作詞した人。その高野の「朧月夜」の情景の根底に、あの蕪村(一七一六〜八三三)の名句、

菜の花や月は東に日は西に

があつたことは疑いあるまい。さらにその蕪村の句も、陶淵明の詩句「白日淪西阿」素月出東嶺」や、「山家鳥虫歌」(明和九年・一七七二刊)に収められた俗謡「月は東にすぼるは西に、いとし殿ごは真中に」を踏まえたものと、すでに注釈されている。日月、西東の一致からすれば、そうなのだろう。

だが、そうした蕪村のイメージの元を探ることよりも、さし当って問題としたいの

は、沈む夕日と昇る夕月との間に広がる広大な景が、菜の花畑だという点である。

その菜の花、蕪村の時代までには、種子から油(菜種油)を絞る技術が確立された結果、畿内では換金性の高い作物として、

菜の花のなかに城あり郡上 許六

と畿内大和は云うに及ばず、江戸は葛西までも、

菜の花や雨のかさいのしひがし 祇徳

と、その栽培が各地で飛躍的に拡大したという、洛中までも菜の花畑が広がっていたらしい。三月ともなれば、それらが咲き匂い、

さながら広き田野に 黄なる絹をしけるがごとし

『農業全書』油菜(元禄十年・二六九七刊)

であった。その美しい情景を目の当たりにした原体験が、蕪村に「菜の花」の一句を構想させ、さらにその水脈から「朧月夜」の豊かな世界が生まれたのだろう。菜の花を詠んだ古歌が無いのが、そうした推定を示唆する。つまり菜の花の美しさを見出したのは、和歌の美意識ではなく、俳諧に育まれた眼と感性であり、その意味でこの花は、まさしく江戸の俳諧の花園に咲く。

むろんその花園には虫もすむ。秋に集く虫だけが虫というわけではあるまい。

みじか夜や毛むしのうへに露の玉 蕪村

王朝人が糸もて貫ける玉にも準えた白露が、ここでは驚くべきことに毛虫の毛に結んでいるという。俳諧の眼による新たな発見である。

なんと鋭い眼だろう。だが江戸の花園には、そうした眼が見出した草花が咲き、鳥や虫たちが遊ぶ。絵師たちは、それを描いた。いや、見出した眼は、俳諧に育まれた眼だけではない。

そこで次号以下、そのような眼に依って生み出された作品を手がかりに、江戸の花園に分け入ってみたい。だがそのためには、わたしたちの先祖がどんな草花を愛で、歌に詠み、絵にしてきたか、あらかじめ見ておく必要があるだろう。わたしたちが身近に眼にする草花や鳥である。にもかかわらず、それらを見つめるわたしたちの先祖の眼は、時代により大きく変わってきたようだ。まずは手始めに王朝人の場合を見ておこう。むろん、卯の花に郭公だけを愛でていたわけでもあるまい(続く)。

佐久市立近代美術館名品展「きらめく日本画―大観・栖鳳から現代まで」では七十一点もの作品を同館から借用いたしました。作品集荷作業にあたり、同館の収蔵庫に入らせていただきました。二階から三階に至る収蔵庫にはびっしりと作品が収蔵されており、あらためて油井二氏コレクションの存在の大きさを認識しました。佐久市では同市出身美術年鑑社長の油井二氏が五〇年間にわたり蒐集した作品七〇〇点が一九七七年佐久市に寄附されたことが契機となり、美術館建設の声が高まり、一九八三年五月、長野県駒場公園の一角に佐久市立近代美術館が開館しました。

油井氏の作品寄附は同美術館コレクションの中核になり、その後も二氏が一九九二年に亡くなるまで寄附は続けられ、さらに息子の一人氏による寄附が現在も続き、同館の新たなコレクションを形成しています。作品購入費の削減などにより収集活動が縮小化しているなか、収蔵品の収集に苦慮している私どもの館にはうらやましいかぎりです。

こうした個人コレクターの寄附が美術館運営に方向性をもたらす例とし

ては県内では、愛知県美術館の木村定三コレクションがあります。江戸時代の浦上玉堂や与謝蕪村などの文人画や近代絵画など三〇〇〇点を超えるコレクションの一部は木村定三コレクション室においてテーマごとに公開が続けられ、修復や調査研究活動の対象としても高い位置づけがされています。質の高いコレクションが活動を保持していると言つてよいでしょう。

油井コレクションは日本画を中心に油彩画・彫刻・工芸・書など各分野にわたっています。このなかには平山郁夫の一九五九年の作品「仏教伝来」、翌年の「天山南路(夜)」など平山郁夫の初期の作品が含まれています。「仏教伝来」は平山の作家としての原点となる作品ですが、こうした作家の初期の作品がみられるのも油井二コレクションの特徴です。

油井氏の収集活動には作家との交流活動のなかで得られたものも多くあります。今回展示されている平山郁夫による油井二氏の肖像画作品もその一つでしょう。佐久市立近代美術館の開館を記念して一九八三年に描かれたものです。

油井氏と親交の深かった人物に武者

小路実篤がいます。事業に失敗した油井に対して武者小路実篤は目の前で達磨を描き励ましたといいますが、武者小路実篤といえば、志賀直哉とともに雑誌「白樺」を創刊した人物で、新しき村のユートピア運動、人道主義で知られています。油井が武者小路に接近したこともこうした実篤の生き方に共鳴したためでしょう。武者小路実篤は美術論執筆のかたわら絵を描いたといえます。今回の展覧会でも実篤が書いた素朴な絵による書画が展示されていますが、油井コレクションには四三点もの実篤の書画が含まれています。

油井二のコレクションには油井氏の生き方の一面が反映されており、その個人コレクターの思いは寄附を受けた佐久市立近代美術館の活動に引き継がれています。



平山郁夫 油井一二像 1983年

EXHIBITION

ゆかりのまち提携三〇周年記念

佐久市近代美術館名品展 きらめく日本画

―大観・栖鳳から現代まで

堀江登志実

会期：平成25年6月8日(土)～8月4日(日)

ユーモアと飛躍 そこにふれる

千葉真智子



D.D. (今村哲+染谷亜里可)《2つで三人》

今夏、開幕する「あいちトリエンナーレ2013」。二回目となる今回、岡崎市はサテライト会場に選ばれていますが、そのために混同されることが多いのですが、トリエンナーレの作品が展示されるのは、康生地区を中心とする街中だけのことで、同時期に当館で開催する展覧会は、これとは別の独自企画。とは言えせっかくの機会、当館も現代アートを取り上げた並行企画事業に名を連らね、岡崎を訪れた方に、さらにもう一つの楽しみをご提供できればと考えています。

展覧会のテーマは「ユーモア」です。「揺れる大地」と銘打ったトリエンナーレが、「場所・記憶・復活」といった非常にシリアスなテーマを取り上げているのに対して、なんと軽いことか、と思われながらも知れません。しかし、気持ちは大真面目です。というのも、震災後の美術と社会において、目に見える実践的な活動が求められるなか、置き去りにされかねない、しかし本質的なこととして大事にすべきものが、それでも愚直に「美術」に取り組むことの凄さ、そしてこころした大真面目な態度によってこそ生まれる「ユーモア」だと考えたからです。もちろん、ユーモアと言っても、単

EXHIBITION

に笑いを誘う、滑稽だけを指しているわけではありません。「ユーモア」という語が、日本語にすんなりと置き換えられないように、そこには様々な含意があります。単純な笑いが（ベルクソンやボードレーが指摘するように）、対象に対する笑う側の優越的立場から生じるのに対して、「ユーモア」の語を使うことで本展で強調したいのは、むしろ哄笑とも言うべき笑いを引き起こす対象の圧倒的な力であり、ときに、こうした笑いを引き起こすことなく、しかし、いとも鮮やかに私たちの思考をひっくり返してしまうその力です。またユーモアは、敗者の精神とも言うべき負の力をもって、私たちが世界の暗部や深部に触れさせることさえあるでしょう。そうしたユーモアのもつ飛躍力、ダイブする力こそが、今の社会に欠かせないのではと考えたのです。

本展ではこのような考えのもと、七組の作家の作品をご紹介します。自ら育てた水草水槽のミクロな世界をカメラを媒介に新たな世界へと変貌させる池田晶紀。生な感触をもつ泉太郎の映像インスタレーションと花岡伸宏の立体は、笑いを引き起こしつつも、何か居心地の悪くなるような世界の暗部を私た

ちに垣間見せてくれるでしょう。カンヴァスの上をバナナやキュウリが踊り、鮭が闊歩する長谷川繁の「絵画」は、その圧倒的な画面の大きさと相まって、笑いを引き起こさずにいません。しかし、その絵を見れば、如何に長谷川が大真面目に絵画に取り組んでいるかが分かるはず。一方、八木良太は、閃きに基づく作品を通して、人間の知覚の曖昧さを鮮やかに示してくれ、D.D. (今村哲+染谷亜里可)の体験型の空間(挿図《2つで三人》)は、私たちが内部へ取り込みながら惑わし、遊びから美術へとその境界を見事に飛び越えていきます。そして、言葉と映像を巧みに使いながら、私たちがそうだと思いつている世界の見方を保留し、私たちの判断思考を引き伸ばしながら、飛躍を遂げる小林耕平の作品。

これらの作品の前に、私たちがまた、ユーモアを持ち、受け止める度量が試されるかも知れません。しかし、このユーモアがもたらす笑いと閃き、逡巡と違和の感覚は、世界の広がりや深さを私たちに感じさせ、「ここ」の先にある「そこ」に、私たちが触れさせてくれることと思います。

会期：平成25年8月17日(土)～10月20日(日)

集荷の旅 (12)

副館長 荒井信貴

副館長になり会議出席以外の出張がめっきり少なくなつたのですが、この号が出るのと前後して久しぶりに返却の旅にでます。開催中の『きらめく日本画』展の展示替えでの佐久市行きです。四月に展覧会の担当者が異動となり堀江班長が急遽引き継ぎ、作品集荷も三泊四日にわたりひとりでごなし無事オープンしていますが、途中一部の展示替えがあります。どうしても借用をお願いしていた平山郁夫の『仏教伝来』と田淵俊夫の岡崎城を背景に凧が舞う『寒風』が佐久市近代美術館の開館記念展で六月三〇日まで展示するため、七月一日の月曜の休館日二日で両館共展示替えをするこ

とになつたのです。
三〇日は堀江班長が佐久市に向かい前泊。私は五時の閉館を待つて平山作品2点と田淵作品1点を撤去、美術品専用車に載せただちに岡崎を出発、中央道を走り九時過ぎにはこの日の宿泊地松本に到着です。翌朝早くに出発し佐久を目指します。堀江班長は朝から美術館に入り借用3点の作品チェックを始めます。やがて私の到着。車から返却

作品を降ろすとともに借用作品を積み込み、堀江班長は岡崎をめざし走ります。残された私は、返却作品の最終チェックをし、お礼の挨拶をして終了です。堀江班長は岡崎に到着するとすぐに、作品を展示室に運び込み、飾り付けを行い後期開始に備えます。古美術など展示期間が制約されることによる入替は、一度に集荷してしまうので楽なのですが、今回のように作品移動を伴う展示替えは本当に大変です。でも来館される方々に、必ず喜んでいただけると確信できれば、労を惜しまないのが学芸員気質かもしれません。今回の旅では朝もやの中、姥捨から見る善光寺平の眺望を楽しみにしています。



COLUMN & TOPIC

あいちトリエンナーレ間近

副館長 荒井信貴

トリエンナーレ開幕も間近に迫り、名古屋あたりでは其処此処で作品設置の情報が聞かれるようになってきていますが、今回初登場の岡崎会場はまだあまり動きがなく、作家の作業は七月に入ってからとのこと

です。岡崎生まれの志賀理恵子さんや岡崎で暮らすstudio velocityの二人がどのような世界を展開させてくれるのか、判らない分、期待も膨らみます。昨年の地域展に出席し、今年本展岡崎会場参加の平川祐樹さんだけは地域調査を進めている中、館へも顔を出してくれています。興味の先はやはり矢作川。河床で見つかった縄文時代の埋没林にご執心です。

松本町会場は、去年名古屋・豊田の両市美術館で大展覧会が行われた青木野枝さんの登場で注目されます。もうペロタクシーの運転手が通勤用の駐車場確保に出発しているとのことです。この周辺は、昨年実施した岡崎三十六地蔵めぐりの中心地で、一〇番源空寺から伊賀八幡門前の一九・二〇番連馨寺・観音堂まで指呼の距離です。水子供養の弘正寺や岡崎の鬼門を護る旧栄久寺の勝軍地蔵を含めればお地蔵さ

んだらけの二帯で、松応寺を中心にした庶民信仰のメッカのようなところ。昔は劇場もあつた繁華街であり、昭和レトロな雰囲気がいまだにのこる街なので、現代美術がどのように溶け込み、また変化をもたらしていくか興味津々です。

昨年も岡崎でトリエンナーレ地域展開事業が行われ、その時この門前でも小規模展示が行われ、街に溶け込むように現代美術のアクセントが付けられていたのですが、会期後はまた元の日常の姿に戻っているものと思っていました。

先日、ぶらりとこの街を訪れ、松応寺太子堂へ向かうと「中を見ていきませんか？」の声、民家を改造し、手作り工芸品などを並べる今はやりのボックス・ショップでした。当番は障がいをもつ子どもさんのお母さんが二人。子どもたちの作つたいたけせんべいを試食。香ばしい香りの中に子どもたちの二所懸命な姿が浮かび、その元気なエネルギーを分けてもらった気分になりました。これまで気が付かなかつたけれど、この街ももうすでに変わりつつあるのかもしれない。

廃線鉄道、あるいはローズ・セラヴィへの道

村松和明

「瀧口修三のシュルレアリスム展」が市立小樽美術館と文学館で開催され、私はその講演会講師に招かれて訪れる機会を得た。小樽は、明治から大正、昭和にかけて経済活動が活発で、北海道を代表する商都として繁栄、同時に美術、文学などの優れた作家を輩出したと聞く。瀧口は富山出身だが小樽には二〇歳のころに二年程滞在する縁があった。彼の『自筆年譜』には「両親が亡くなり大学にも失望したとき関東大震災に遭い、学資金も失い退学。そして嫁いで小樽へと越した姉の島操を頼って雪深い小樽に渡り、一九二五年に姉弟共同出資で『島屋』という文房具や手工芸を売る店を始め、店番などを手伝う（筆者要約）とある。この青年の夢の断片のような店は、小樽でも実在は確認されていなかったが、本展の調査によって一九二五年に花園町西三ノ二九に開業、姉没後も一九八八年まで島家によって営業されていたことが分かった。瀧口は『自筆年譜』一九六四年に「オブジェの店をひらく」という想像にとりつかれていたが、その架空の店の命名をデュシャンに依頼する

と、三月、ローズ・セラヴィという彼の若い頃の有名な偽名をあててえてくれた」と書いたが、「オブジェの店」とは、四〇年前に「美しいまぼろし」と慕った姉の操と開業した「島屋」が、若き日の幻影のようになって彼の心に棲みついていたからではなかったか、そう思いをはせながら館を出ると、建物に寄り添うように廃線鉄道が今も真直ぐに町を貫いていた。手宮線は南小樽駅から市内の手宮駅を結ぶ旧国鉄の北海道最初の鉄道区間だったが一九八五年に廃止された。

一九二五年、パリではシュルレアリスム運動が始動しはじめた頃、瀧口青年は、この鉄道で往来していたはずだ。その道はブレイクのイノセンスの思想を通して、まだ見ぬローズ・セラヴィとの運命的な出会いへと繋がっていたのではなからうかと思われた。



廃線手宮線と市立小樽美術館

COLUMN & TOPIC

歴史に育まれる彩り

湯谷翔梧

そうだ、萩に行こう。
この夏も発売される青春18きっぷ。ポスターを見て浮かんではそうした思い付きでした。
岡崎に来る前は山口県史の編さんに従事しており、萩市にも何度か訪れました。
萩の旅は色を追いかける旅。空の青に海の蒼。それに彩りを加える、漆喰の白と夏みかんの黄。たくさん歩くから、かばんには麦茶・タオルに江戸時代の絵図のコピーだけ。そうした旅が出来るのは、地層のように積み重ねられてきた歴史が残っているから、そんな風に思います。
萩が歴史の表舞台に立つのは、江戸時代に入ってから。関ヶ原で敗れた西軍の総大将毛利輝元は、所領の激減に伴い、城を広島から萩へと移しました。城下には毛利氏家臣・町人が住み、萩は政治・経済の中心地として発展していきます。

しかし幕末の二八六〇年代、萩に転機が訪れます。激動の情勢に対応するため、政治の中枢を山口へと移したのです。
明治の世になると、さらなる変化が起きます。生活の基盤を失った武士たちは、新たな収入の途として夏みかんの栽培を始めます。一方で萩を含む日本海側は「裏日本」として経済発展に後れをとっていききました。しかしその停滞ともとれる状況が、萩の歴史的蓄積を真空パックし、現在まで伝えてきたといえます。

また萩の人々の、歴史を守り、活かそうという努力も忘れてはいけません。日本で初の重要伝統的建造物群保存地区に指定され、現在では「萩まちじゅう博物館」として取り組みが行われています。
こうして残されてきた様々な色と貴重な町並みから、学芸員としても、美博としても学べることはたくさんあるに違いない。ぜひ行こう。
…と調べていたら所要時間一五時間半…今年はこの妄想旅行記で終わります。



INFORMATION

ユーモアと飛躍 そこにふれる

2013年8月17日(土)～10月20日(日)

■D.D.による「不合理な一石二鳥のティータイム」(全4回)

D.D.が作った不合理な家(作品空間)の住人となり、様々なことをしながら1時間半を過ごします。

日時:8月21日(水)、8月31日(土)、9月22日(日)、10月14日(月・祝)

いずれも14:00～15:30

会場:当館展示室

定員:各回8名(未就学児の参加不可、グループでの参加は2名まで)

申込締切:各回とも開催日の10日前まで(申込方法は下記のとおり)

■池田晶紀×タナカカツキ(漫画家) ワークショップ「自然とゲームしまししょう」

講師と一緒に、シェアリングネイチャーゲームを体験します。

9月8日(日) 10:00～14:00 *雨天の場合は9月14日(土)

会場:当館周辺野外 ※昼食を一緒にとります。

定員:30名(グループでの参加は4名まで)

申込締切:8月23日(金)(申込方法は下記のとおり)

<「不合理な一石二鳥のティータイム」、「自然とゲームしまししょう」申込方法>

往復ハガキに希望イベント名(「ティータイム」は日にちも)・代表者氏名・ふりがな(小学生以下の場合は保護者氏名もご記入ください)・年齢・郵便番号・住所・電話番号・参加者全員の氏名・ふりがな・年齢を明記の上、締切日までに岡崎市美術館「イベント係」までお申し込みください。(必着) ※当館ホームページからもお申し込みいただけます。

■小林耕平デモンストレーション(全5回)

日時:各回ゲスト:

8月25日(日)平倉圭(横浜国立大学教育人間科学部准教授)

9月15日(日)榎本俊二(漫画家)

9月21日(土)仙田学(小説家)

10月5日(土)神村恵(ダンサー・振付家)・福留麻里(ダンサー)

10月20日(日)core of bells(5人組バンド)

いずれも14:00～16:00(開始時刻前に展示室前にお越しください)

会場:当館展示室

■泉太郎パフォーマンス「骨抜き用トンク」

日時:10月12日(土) 14:00～16:00

(開始時刻前に展示室前にお越しください)

会場:当館展示室

■作家トーク

8月17日(土) 長谷川繁

9月23日(月・祝) 花岡伸宏

10月13日(日) 八木良太

いずれも14:00～15:30

会場:当館セミナールームおよび展示室

定員:各回70名(12:00より受付カウンターにて整理券配布予定)

■学芸員によるギャラリートーク

8月18日(日)、9月29日(日) 両日とも14:00～

会場:当館展示室

※イベントは全て参加・聴講無料(ただし当日の観覧チケットが必要)

■【関連小展示】妄想の空間を連結しよう

2013年9月10日(火)～10月20日(日) *鑑賞無料

美術館ロビーにて、D.D.によるワークショップに基づく作品展示を行います。

「別世界への一步」

生まれてこの方芸術には縁がなく、小中学校の写生大会ですら弁当の楽しみをしていた。そんな人間が、4月からこの美術館で施設管理を任されることとなった。

前の職場では公共建築物における設備の設計や工事を担当していた。日々の仕事が建設・工事から維持・管理へと変わったことで、以前の自分では気にも留めなかった建築物や深く考えていなかった設備について新たな視点から眺めることができるようになった気がする。遠ざけてきた芸術についての認識も同じことではないか。異動直後から開催された「ポール・デルヴォー展」では、画家の一生を追い、情勢や心情によって変わっていく画風によって、画家も一人の人間であることを初めて認識することができた。一枚の絵として見ていたものはその時代における過去から未来へのつながりを知ることによって印象を受ける。

苦手と感じる分野でもどんなきっかけであれ少し踏み入ってみることで、それまでの自分とは違う視点や考えを持つ機会を得ることになる。その機会を生かすも殺すも自分次第だが、縁あって触れることとなった「芸術」という分野については、もう少し歩み寄ってみようと思う。(磯)

おしゃべり、あれこれ。

そうだ、静岡行こう!

年明け初旬のある日のこと。「どこか行きたい!ドライブしたい!」そんな衝動に駆られ、急な思いつきで静岡に行くことにした。思いついたものの一人旅は何だかさみしいので、大学時代の友人を巻き込むことに。本当に思いつきのため、ほぼノープラン。宿泊先とざっくりとした目的地だけを決め、二週間後に出発した。

雲ひとつない冬晴れの朝、出勤時間より早く出発。友人と合流し、まずは浜松へ。お菓子工場の見学をした後、隣の友人のリサーチを頼りに、世界長い木造歩道橋、蓬萊橋へ。強風で吹っ飛ばされそうになりながらも何とか橋を往復し、その途中で小さく見つけた富士山に大興奮!それから富士山の虜?になってしまい、行く先々で富士山を見つけては大騒ぎ(移動中、ほぼどこからでも見え、その大きさに改めてビックリ)。今話題の三保の松原にも立ち寄り、青々とした茶畑の間を縫ってドライブし、海鮮丼を堪能し…二日間ではあったが、偶然にも世界遺産を先取りでき、羽伸ばしもでき、そしてナビ上手な助手にも恵まれ、癒しの旅となった。気ままに走ったせいか、総走行距離は四〇〇キロ超。心地よい疲れと充実感を感じながら帰路に就いた。こんな自由旅、いつかまたしてみたい。(佑)

編集後記 | 暑い季節がやってきました。今夏は、トリエンナーレのサテライト会場として、岡崎の街も賑わいを見せることと思います。当館にもその余波が及ぶことを大いに期待したいところ。目下、1時間にバスが一本というハンデを如何に乗り越えるかに頭を悩ませているところです。(干葉)

表紙図版:長谷川繁 2010年



開館時間 午前10時～午後5時

※最終の入場は閉館時間の30分前まで

休館日 月曜日(祝日に該当する場合は、その翌日以後の休日でない日)

年末年始 ※展示替えのため臨時休館する事があります。

[岡崎市美術館ニュース/アルカディア] 第57号 2013年7月発行

編集・発行 岡崎市美術館(マインドスケープ・ミュージアム)

〒444-0002 愛知県岡崎市高隆寺町峠1 岡崎中央総合公園内

TEL.0564-28-5000(代表)

岡崎市美術館

<http://www.city.okazaki.aichi.jp/museum/bihaku/top.html>

ARCADIA